

AICHI  
PREFECTURAL  
MUSEUM  
OF  
ART

MEMBERSHIP

愛知県美術館友の会・会報 第33号

# 空中回廊

この企画展は画家の自画像[島田章三展] / 会員のひろば / 講座ダイジェスト[東日本大震災の文化財レスキュー] / 愛知県美術館より / 愛知県美術館コレクションから[島田章三《石庭女人図》] / 友の会活動紹介



島田章三《石庭女人図》1976年

この企画展は画家の「自画像」

# 島田章三展 日常が「かたち」になる時

2011年9月16日(金) から 10月30日(日) まで開催

この地方在住で少しでも美術に関心のある人だったら「画家 島田章三」の名は誰もが知っているのではないのでしょうか。その島田章三画伯の大規模な展覧会が開かれます。

## その出発点

今回の島田章三展は、愛知県美術館と神奈川県横須賀美術館で開催されます。この二つの美術館は、画家の生まれ育った横須賀、そして画家としてまた指導者として大きな業績を残した愛知と、それぞれ関わりの深い地での開催になります。

1933年、島田章三は港町横須賀で生まれまし

た。インテリアデザイナーの父、歌人の母という恵まれた家庭環境で育ち、1954年に東京藝術大学美術学部に入學しました。学生時代に国画会に出品した《ノイローゼ》がいきなり国画賞を受賞しました。不安な時代を暗い女性像として表現した作品です。

## キュビズムを日本人の言葉に

画伯がはっきりと画家としての意識をもったのは1967年《母と子のスペース》で安井賞を受賞し、翌年からヨーロッパに在外研修員として留学した頃だったと言います。ブラックやレジェの作品を見て、人間の生活している身近に心ひかれ、以後40年以上このテーマを貫いています。留学からの帰国後に、愛知県立芸術大学の助教授となりました。

留学中に触れたヨーロッパの美術から「キュビズムを日本人の言葉（造形）に翻訳する」ことを自らの造形の課題にしました。1974年に県



《ノイローゼ》1957年 横須賀美術館



《母と子のスペース》1967年 東京国立近代美術館

立芸大教授となつてからは「中日文化賞」「宮本三郎賞」などを受賞し、現在まで我が国を代表する画家であり続けています。

「かたちびと」という表現

「かたちびと」という独特な人物表現は、日常的情景を幾何学的に構成しつつ、あくまで「人間の生活空間」を表現したもので、40年以上もこのテーマにこだわり続けています。愛知県美術館の所蔵する《石庭女人図》は、暗い色づかいの中に、描かれた女性と、石庭という全く異質な要素をまとめた意欲的な作品です。その後のジーンズを着た学生を描いた《課題制作》や《はなかたちひとかたち》など島田芸術の真骨頂を見ることができます。島田章三は、2001年に県立芸術大学の学長に就任され、芸術分野の教育者としても多くの後進を育てられました。2007年には愛知芸術文化センターの総長に任命され私たちが時折お姿をお見受けすることもあり、身近に感じられる芸術家です。また、この度の東北大震災のためのレクイエ



《東北に捧げる十字花》2011年 個人蔵

ムとして《東北に捧げる十字花》という最新作も展示されます。この展覧会では島田芸術の真髓を是非鑑賞していただきたいと思います。(宮崎玲子)

次回展覧会

11月11日(金)～2012年1月22日(日)

生誕100年 ジャクソン・ポロック展

愛知県美術館では、今年11月に「生誕100年 ジャクソン・ポロック展」を開催します。ジャクソン・ポロック(1912-56)は、床に広げたキャンパスの上に、塗料を撒き散らすという技法で絵画を制作したことで知られる、アメリカの画家です。彼の絵画は、この制作過程の特徴から「アクション・ペインティング」とも呼ばれました。その最盛期の作品は、一見すると、ただ塗料の網の目のように重なっただけの画面に見えますが、実は19世紀以降の絵画芸術が格闘してきた課題 - 現実空間の再現に頼ることなく、絵画独自の空間を探求すること - に対する回答としても大変重要な作品群です。本展では、初期から晩年に至る作品を国内・海外から集め、ポロックの画業の全貌を紹介します。

20世紀の画家としてあまりにも有名なポロックですが、実はその本格的な展覧会が日本で開催されるのは今回が初めてとなります。ポロック研究者である当館の大島学芸員渾身の企画として、それがここ愛知県美術館で実現します。友の会の皆様もどうぞご期待ください。(学芸員 中西園子)



ジャクソン・ポロック《ナンバー7,1950》1950年

## 会員のひろば

# 総会記念講演会 / 友の会特別鑑賞会 『棟方志功』展 友の会講座「東日本大震災の文化財レスキュー」

村田眞宏館長 総会記念講演会「絵の中の鳥、自然の中の鳥」

5月28日、友の会総会に引き続き、村田館長の講演会がありました。ご自身の趣味として撮影した野鳥の写真と、鳥が描かれた日本画を対比しながら、描かれた鳥の姿に画家の意図を読み取る楽しみがあるという興味深いお話でした。

丹頂の尾は実は白くて、多くの日本画では飛んでいる姿が間違っ



サシバ(村田館長撮影)



スライドを解説する村田館長

らないこと。画家は鳥の習性を知りながら、なぜそのように描いたのかと考える面白さがあること。曾我二直庵の《松鷹図》では、幼鳥と親鳥の区別がつくと作品の意味が深く考えられることなど、今後の鑑賞にも役立つ視点を示されました。近代日本画では自然の姿を常識的に前提として描いてあるが、現代ではこの前提が崩れていることや、野鳥の観察を通して自然の急激な変化を感じるというお話などから、自然と芸術の緊密な関係を再確認しつつ、自然に目を向ける必要性を強く感じました。(小林克敏)

特別鑑賞会「棟方志功 祈りと旅」展

7月14日(木)、昼夜の2回に分けて「棟方志功 祈りと旅」展の特別鑑賞会が開かれました。

始めに平井学芸員より棟方志功の人となり・展示会場のみどころをレクチャーしていただいたうえで、夜の展示会場へ。

夜の部の鑑賞会は特に、ゆったりした雰囲気の中かで展示会場をまわることができます。今回もレクチャーを担当して下さった平井学芸員や、飛び入りで説明して下さった村田新館長たちと共に鑑賞することができました。

《大世界の柵》に圧倒さ



巨大な作品《大世界の柵》の前にて

友の会講座「東日本大震災の文化財レスキュー」

7月10日、東日本大震災での文化財レスキュー活動について、お二人の学芸員による講座が開催されましたのでご紹介します。

「石巻文化センターの文化財レスキュー」

.....大島徹也学芸員  
全国美術館会議による石巻文化センターの文化財レスキュー第1陣には、全国の美術館から学芸員6名が集まり、大島学芸員はその1人でした。4月27日から29日までの3日間で、同センターの収蔵庫から約200点の美術品を助け出し、応急処置を施して、宮城県美術館に移送・保管することが第1陣の任務です。限られた時間の中で200点もの作品に対処するためには、損傷の度合いによって応急処置をどこまで施すべきか、その場で即座に判断を付けねばならず、その点では肉体的というよりはむしろ精神的にきつい作業だったといえます。

現場では、カビの害が予想以上に進行していたことが判明しました。そのため、宮城県美術館への移送は予定通り完了したものの、10日後となる第2陣の到着を待ってはられないということで、兵庫県立美術館の学芸員と大島学芸員の2名は宮城県美術館に留まり、追加の応急処置を続けました。その間に救援スタッフが数名合流、5月3日に彼らに仕事を引き継ぎ、大島学芸員は無事任務終了となりました。



収蔵庫前にて絵画の梱包作業

「今回の活動を通じて（想定東海東南海地震を考えた時）」.....長屋菜津子保存担当学芸員

愛知県美術館（以下、県美）は文化庁の文化財レスキューに、全国美術館会議という枠組みの中で参加しています。おもな美術館が加盟しているこの組織は、現実的な機動力を持ち、文化庁のレスキュー事業という大きな枠組みの中でも特に重要な役割を担っています。県美はここに職員を派遣するだけでなく、企業協賛を探したり、備品の貸出を行ったりといった様々な協力も行っています。備品の貸出時には友の会「所蔵品管理サポート部会」の皆さんが手作りして下さった作品用小布団もいっしょに送りました。これは現在、立体と日本画の修理を引き受けた東北芸術工科大学保存修復センターで活用されています。

また県美は、これらの活動に参加しながら、

想定東海東南海地震に向けた対策の見直しを行っています。事前に整備しなければならない県としての体制のことなど、様々な問題点が見えてきており、改善は急務であるという報告でした。



石巻文化センター駐車場での応急処置

(平松章子)



修復処置に利用されている友の会製作の小布団

愛知県美術館より

## 村田新館長の挨拶 新学芸員の紹介

ごあいさつ 愛知県美術館長 村田眞宏

東日本大震災は、被災地から遠く離れた当館の活動にも大きな影響を与え、4月以降、その対応に追われてきました。そのなかで当館が参加している被災地への支援として、被災を受けた美術品や文化財を救出して応急処置を施すことを目的とした、文化財レスキュー活動があります。友の会からは、この活動に対して、被災を受けた美術品を移動したり、応急処置を施したりする時に使用する手作りのクッションをご提供いただき、被災地に送っていただきました。

友の会の皆さんの、日頃から当館をサポート



鎮魂の祈りを込めた展示会場にて

企画業務課学芸員 中西園子

本年度から愛知県美術館学芸員として勤務しています。出身は滋賀県、大学時代は京都で過ごし、美術批評・美術理論を学びました。専門家からアマチュア



によるものまで、作品の語り方には様々なものがあります。美術館の役割は、第一に正確かつ客観的な情報とともに作品を紹介することですが、個々の作品の魅力を伝える表現も探っていきたいと思っています。これぞ、というすてきな表現をお持ちの方はぜひこっそりと教えてください。

してくださっている活動が、今回のような非常時に、そのまま被災地の美術品を支えてくださったことは、本当にうれしく、また友の会と美術館にとっての誇りだと思っています。

ご承知のとおり、美術館の活動と運営をとりまく環境は日々厳しさを増しています。そのなかで友の会は、私たちにとってかけがえのない支えになってくださっています。これからも友の会の皆様と、さまざまな活動や交流を重ね、さらに深く成熟した協力関係を築いていきたいと願っています。

館長の横顔

村田眞宏（むらた・まさひろ）

1954年、津の生まれ。今、三重県立美術館がある辺りで鳥や虫を追っかけていた。考古学少年時代を経て、関西大学では美学・美術史を学ぶ。数年間、四日市海星高校で世界史などを受け持つも、再び大学に舞い戻って快慶を中心とした鎌倉時代の彫刻を研究。1982年、福島県立美術館の準備室で学芸員生活を始める。1989年、愛知県に移り開館準備を経て愛知県美術館学芸員。

趣味は、幼少期から一貫して「生きもの」系。愛知に来てしばらくフィッシングにのめり込むも、近年はバードウォッチング専攻に。タカを狙って超望遠レンズを振り回す姿が渥美半島あたりで目撃されるとか。

美術課学芸員 平井啓修



はじめまして。新入学芸員の平井啓修（ひらいよしのぶ）です。今年の3月まではずっと大阪で過ごしており、なんと研究も大坂画壇という根っからの大阪人です。

愛知県美術館はコレクションの保存に対する意識も非常に高く、日本有数の美術館と言われる理由を肌で感じながら仕事ができる毎日が楽しくて仕方ありません。先輩方から多くを吸収して日々成長して参りたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

愛知県美術館コレクションから 深く知ると、もっとみえてくる

## 島田章三 《石庭女人図》

(編)ここでご紹介する所蔵作品《石庭女人図》を、本会報表紙に掲載しました。

一輪の花を持ちながら、一人の女性がこちらを向いて座っています。《石庭女人図》というタイトルがつけられているからには、この女性が座っている場所は石庭なのでしょう。モノクロームに抑えられた色面が石庭らしい、どこかノスタルジックな雰囲気を伝えています。しかしながら、スカートをはいた女性の姿に注目してみれば、この場面が現代の日常的な風景であるとも感じられます。では、古い石庭のなかにそうした人物が描かれているのはなぜなのでしょうか？



《石庭女人図》1976年 愛知県美術館

横須賀生まれの島田章三は、東京藝術大学在学中に国画賞を受賞、造形に情動的なものを込めるスタイルを携え、若くして画壇にデビューします。1966年には、愛知県立芸術大学の創立に際して専任講師として招かれます。翌年には《母と子のスペース》により若手洋画家の登竜門として名高い安井賞を受賞します。さらにその翌年、愛知県在外研修員としてヨーロッパへと留学し、西洋近代絵画の巨匠たちの芸術に触れます。そこで島田はとりわけピカソやブラック、レジェといった画家たちのキュビズムに強い影響を受け、「キュビズムを日本人の言葉(造形)に翻訳」することを自らの課題として見出しました。その課題の探究の成果として、幾何学的に構成された日常生活

空間のなかに描きだされる独自の人物像「かたちびと」が誕生することになります。

ところで、愛知県立芸術大学の教官でもあった島田は、学生たちの引率のため



《課題制作》1980年 東京国立近代美術館

京都や奈良へ「古美術研究旅行」へと行くことができました。古い日本の寺院や石庭のなかの、スカートやジーンズをはいた学生たち その不思議な組み合わせに、彼は目を向けました。当館が所蔵する《石庭女人図》は、そのときの印象をもとにして描かれたものです。遠い過去へと遡っていくような時間を感じさせる石庭と、日常的な現代の風景という、二つのイメージが重ねあわせながら、この女性像は描かれています。

20世紀初頭の西洋に起こった革新的な美術動向であるキュビズムの手法を援用しながら、それをあくまでも日本人としての感性で咀嚼し、身近な情景を描き続ける島田章三。そのようにして彼の手により描かれた人物像を「かたちびと」と呼ぶとするなら、まさしく過去と現在、西洋と日本といった異質なものが織り交ぜながら描かれた《石庭女人図》の人物像は、その代表的なものの一つであると考えられるでしょう。(塩津青夏)

### 学芸員の横顔

塩津青夏(しおつ・せいか)  
愛知県美術館学芸員  
鹿兒島県出身。昨年度から県美の学芸員として教育普及にかかわる。島田章三展で企画展を初担当。趣味は剣道。





AICHI  
PREFECTURAL  
MUSEUM  
OF  
ART

# MEMBERSHIP

## 理事会から

本年度定期総会が5月23日に開かれ、議案は原案通り承認されました。今、友の会の活動が被災地への支援の一助にもなっていますが、楽しみのある活動も目指して運営していきます。今後とも会員増にご協力お願いいたします。

〈新役員〉

[会長] 油田弘佑 [副会長] 塹江光子

[総務担当理事] 大野三郎

[所蔵作品管理サポート担当理事]

荻野 孝 大石悦子

[講座講演担当] 平松章子 塹江 光子

[モニター担当理事] 大野三郎 中塚千佳

[イベント担当理事] 森 健次 大石悦子

[広報会報担当理事] 小林克敏 中塚千佳

[監 事] 竹内清美 武藤和子

[顧問] 太田幸一 宮崎玲子

[担当学芸員] 深山主任学芸員 中西学芸員



新役員(総会后)

## 友の会活動紹介

### 「麻生三郎展」

- 5月 特別鑑賞会(昼・夜)
- 5月 総会
- 5月 総会記念講演会(村田館長)

### 「棟方志功 祈りと旅」

- 7月 講座(大島学芸員・長屋学芸員)  
「東日本大震災の文化財レスキュー」
- 7月 東北復興支援企画 津軽三味線ライブの準備サポート
- 7月 特別鑑賞会(昼・夜)
- 7月 記念講演会(武田公平氏)「棟方志功と青森」のサポート

### 定例活動

- 美術館モニター 2回
- 所蔵作品管理 のべ10回
- 木村コレクション...風呂敷補修手入、ボジの名刺・台帳作成
- 備品...枕・座布団・紐の制作
- 作品用包帯・作業用手袋・布等の洗濯
- キャプションの整理
- 石巻文化センターへ座布団発送
- 発送 のべ3回 受付 のべ4回
- 会報発行 第33号発行
- ホームページ 随時更新
- 中国で紹介 裏面で紹介



### 特別鑑賞会

麻生三郎展にて。ギャラリートークは初参加。学芸員の方の話が分かりやすく、その後、再び出かけました。震災で圧迫や不安を感じている今、励ましのメッセージをくれる作品でした。(加藤大典)

### 総会記念講演会

「ゆるい話です」と前置きされた館長の講演でしたが、自然の中の鳥を知ることは、鳥が描かれた絵の鑑賞を面白くするだけでなく、自然との繋がり方までも考えることになるという「深いお話」でした。(中塚)



### 友の会講座

文化財レスキューの活動や美術館の働きなどについてのお話を伺い、美術作品の保護や守り伝えていくことへの思いが胸に迫ってきました。長期的な支援が必要だと痛感しました。(大矢真美代)



## これからの企画展のご案内

### 島田章三展

9月16日(金) 10月30日(日)

### 生誕100年 ジャクソン・ポロック展

11月11日(金) 2012年1月22日(日)

## 友の会入会のご案内

友の会の詳しい活動内容を知りたい方、入会をご希望の方は、下記までお問合せ下さい。

10階愛知県美術館受付

友の会事務局(火・木・金・土 10:00-16:00)

052-971-5511(代) 内線347

tomonokai@aac.pref.aichi.jp

### 編集後記

東日本大震災による影響やその対応などが、この会報の中にも多く記されました。将来必ず起こるであろう大災害に対して、恒久的に文化財を守るための努力を知り、友の会の長年の積み重ねが生かされたことが救いで。(小林克敏)

□編集 小林 克敏/中塚 千佳/水野 愛子/大矢 真美代  
平松 章子/松下 智子/宮崎 玲子/森 健次

□協力 愛知県美術館

□発行 2011年9月

愛知県美術館友の会

〒461-8525 名古屋市東区東桜一丁目13-2

愛知芸術文化センター内

TEL: 052-971-5511(代)内線347

FAX: 052-971-5617

E-mail: tomonokai@aac.pref.aichi.jp

美術館ウェブサイト: <http://www-art.aac.pref.aichi.jp>